

段ボール製造販売の老舗「三星」(坂井市春江町江留中、灰谷佳洋社長)は、写真などのデータを直接段ボールにフルカラー印刷できるデジタル印刷機を真内で初めて導入し、小ロットで販売するサービスを始めた。2024年春の北陸新幹線真内開業を見据え、これまで「脇役」だった段ボールを商品や企業のプロモーションに活用してもらう。

同社は1934年創業。戦前は和菓子などを入れる貼り箱を中心に製造し、戦後の高度経済成長とともに段ボール製造にシフトし

# 段ボールで販促支援



デジタル印刷機(左)で印刷した段ボール＝坂井市春江町江留中の三星

## 県内初のデジタル印刷機

た。段ボールは本来、商品の梱包や保護など物流面のサポートする役割が中心。取引先は製造業が多く、灰

谷社長は「商品に大きな違いはなく、価格競争になっていた。他社との差別化が難しい業界」と話す。

を受け、販促効果を高めるデザインの提案も行う。同社では約10年前からCADを使った段ボール設計を手

創業90周年を見据えて事業拡大を図ろうと、昨年5月に国の事業再構築補助金を活用してデジタル印刷機を導入した。従来は「版」を使用して大量に印刷する凸版印刷で、白と黒、赤と黒など多くが2色までしか使えなかった。一方、デジタル印刷機は専用の水性インクを使い、商品や企業のイラストや写真データを段ボールに直接印刷することが可能で、小ロットでもコストが抑えられるほか、デザイン変更にも素早く対応できるのが特徴。

同社はデジタル印刷機導入に合わせ、段ボールで企業のプロモーションを支援する新事業「ダンプロ」を始めた。1枚からでも注文

かけており、直方体だけでなく新幹線型やペン立て型など複雑な形状にも対応する。

これまでは建材や電子部品、プラスチックなどのメーカーが主な顧客だったが、6次産業化に取り組む農業者や土産店など新たな顧客開拓にも取り組んでいく。売上高は5年後の10%増を目指す。

灰谷社長は「季節や商品に合わせて効果的なプロモーションが可能となるなど、段ボール自体に付加価値を付けることができた。消費者の手元に届いたときに感動してもらえ、段ボールを作り、顧客企業の売り上げ増に貢献していきたい」と意気込む。

(山川竜平)

三星 坂井



灰谷佳洋 三星社長

「包装を科学する」との理念の下、段ボール製造のほか紙器やプラスチック製容器の販売などを手がける。本社工場を含め、県内に工場2カ所。2022年9月期の売上高は6億8千万円。従業員数は約40人。